アイリス・マードックの衝撃

野　中　　涼

私がマードックの小説に奇妙な衝撃を受けたのは1960年代の終わり頃です。当時高く評価されていたモダニズムの作品とちがって、風変わりな人物がたくさん登場することに驚きましたが、語り手がたえず何かを誤解するために、物語が次つぎ思いがけない方向へ展開して、おそろしく複雑に錯綜する状況が生みだされることにも驚きました。

たとえば『網のなか』のジェイクは、パリ祭の群衆に恋人の姿を見かけて追いかけ、追いつき、声をかけると、それがまったく別人だったと知って唖然とする。ベストセラーを狙うだけの凡作と思いながら英訳してやっていたフランス人作家が、あるときゴンクール賞をもらったと知って、大変なショックを受ける。そういう思いちがい、思いこみ、思いすごしの誤解の場面が、あまりに多かったのです。

しかも彼女の語り口は、しばしば読者を瞬間的に誤解させ、戸惑わせて、微笑をさそう。『鐘』のドーラは、混みあった汽車の中で、老婦人が立っているのを見ると「席は絶対ゆずらないわ」と決心したとたんに、さっと立ちあがって、「どうぞ、ここにお座りください。私はすぐ降りますので」と笑顔で言う。『ブラック・プリンス』の主人公は冒頭で、旅支度をととのえ、さあタクシーを呼ぼうとすると、座って少し考えてみたくなってしまって、「こういう癖をロシア人は一つの慣習だなんて得意がっているそうだ」とつぶやきます。語りの戸惑いとも呼びたいこの癖は、似た例にドストエフスキーの癖がすぐ思い浮かびますが、そこに影響関係があると示唆したのかどうかはわかりません。

さらに人物たちの行動に常軌を逸している場合が多い。『海よ、海』のチャールズ・アロビーなどは、ストーカーのように人妻を待ち伏せしたり、台所の窓をこじ開けて侵入したり、ついには拉致監禁までする。この厚かましい振る舞いはまた『源氏物語』に似ていて、光源氏もよくまあ途方もないことを平然とやってのけるなと思うところがありますから、影響関係というより、かなり大胆不敵な想像力のふてぶてしさをどちらも共通に備えていた、と推定してみたくなります。

ところでマードックは、サルトル論や倫理哲学の論考で、現実の複雑性、偶然性、還元不可能性にもっと留意して表現すべきだ、と主張していました。これもモダニズム心酔者には一つの新鮮な衝撃でした。彼女は人物たちに誤解の紆余曲折をたどらせることで、いかにも自然に現実の混沌を描きだし、ユーモラスだったり、怪奇的だったり、神秘的だったりする物語性豊かなフィクションの創作を可能にしていたわけです。

しかし威勢のいい論考の批判文には、いくぶん性急な思いすごしの誤解がありはしなかったか、という気が私などはしています。サルトルは現実の還元不可能性を許せないので「現実は敵だ、他者とは地獄だ、などと言う」とにがにがしく指摘するけれども、彼の想像力論が認識作用のメカニズムの限界を真剣に論究していたこと

にはなぜ目をつぶったのか。ケインズやムーアの‘Sincerity’をロマンティシズムのあやまちだと否定するけれども、彼女が敬意をもって肯定するシモ—ヌ・ヴェイユの‘Attention’とどこがどう違うと言えるのか。プラトンの洞窟の比喩や、ピュロンの判断中止の懐疑主義以来、人間は現実を正確に認識できないというペシミズムが、ヨーロッパの思想史に長く一貫して継承されてきた重要な主題であるのを考えると、彼女の‘Good’や‘Perfection’の理念はその系譜のうちのどこにどう位置づけられるものなのか。